

縄文時代草創期土器の 煮炊きの内容物と植物利用 王子山遺跡および三角山 I 遺跡の事例から

Consideration of Plant Use and Foodstuffs Cooked in Incipient Jomon
Potteries : A Case Study from the Ojiyama and Sankakuyama I Sites,
Southern Kyushu, Japan

工藤雄一郎

KUDO Yuichiro

はじめに

- ① 遺跡の位置と概要
- ② 分析試料と分析方法
- ③ 分析結果
- ④ 考察
- ⑤ まとめと課題

【論文要旨】

縄文時代の開始期の植物利用については、これまで土器の出現と関連づけて様々な議論が行われてきた。出現当初の縄文時代草創期の土器は「なにをどのように煮炊きするための道具だったのか」という点をより具体化し、列島内での土器利用の地域差などを検討していくことは極めて重要な研究課題である。2012年に発掘された宮崎県王子山遺跡からは、縄文時代草創期の炭化植物遺体（コナラ属子葉、ネギ属鱗茎）が出土した。筆者らは、これらの試料の炭素・窒素安定同位体分析を行い、また、王子山遺跡および鹿児島県三角山 I 遺跡から出土した隆帯文土器の内面付着炭化物の炭素・窒素安定同位体分析を実施し、土器で煮炊きされた内容物について検討した。この結果、王子山遺跡では動物質食料と植物質の食料が煮炊きされていた可能性が高いことがわかった。王子山遺跡から出土した炭化ドングリ類は、土器による煮沸の行程を経てアク抜きをした後に食料として利用されていたというよりも、動物質の食料、特に肉や脂と一緒に煮炊きすることで、アク抜くのではなく、渋みを軽減して食料として利用していた可能性を提示した。一方、三角山 I 遺跡では、隆帯文土器で海産資源が煮炊きされた可能性があることを指摘した。これらの土器の用途は、「堅果類を含む植物質食料のアク抜き」に関連づけるよりも、「堅果類を含む植物質食料および動物質食料の調理」と関連づけたほうが、縄文時代草創期の植物利用と土器利用の関係の実態により近いと推定した。

【キーワード】 縄文時代草創期、土器内面付着炭化物、安定同位体分析、¹⁴C年代測定、植物利用